

## 博士学位請求論文審査報告

2012年3月14日

申請者 山城雅江  
論文題目 Pop 的／アメリカ的：ウォーホルから＜沖縄＞へ  
審査委員 鶴飼哲 三浦玲一 田仲康博

### 1 本論文の構成

本論文は、アンディ・ウォーホルにおける「ポップ」という概念の探求を軸にアメリカと沖縄の歴史的・文化的諸関係を考察した、アメリカ研究、沖縄研究、ポスト植民地文化研究、美術史、哲学、文学、写真論、映画論等の諸領域を横断する学際的研究である。

本論文は次の各章から構成される。

プロローグ

序論

#### 第一部 Pop/pop

- 第一章 ウォーホルの出版物
- 第二章 Pop Art とアメリカ60年代
- 第三章 イフェクト・効果
- 第四章 物量のアメリカと沖縄文学
- 第五章 キーワード：「沖縄ポップ」 1

#### 第二部 デモクラシー

- 第六章 アメリカ、マスの時代
- 第七章 表面／surface
- 第八章 すべて・みんな／everything
- 第九章 米琉親善
- 第十章 キーワード：「沖縄ポップ」 2

#### 第三部 アメリカ／沖縄

- 第十一章 写真とアメリカ
- 第十二章 マシーン・機械
- 第十三章 アメリカ的
- 第十四章 写真・映像と沖縄

## 第十五章 キーワード：「沖縄ポップ」 3

結論

エピローグ

付録

参考文献

### 2 本論文の概要

本論文は「Pop」という20世紀後半にその使用頻度を著しく増大させた言葉をめぐる考察から出発する。この言葉はまず「popular(ポピュラー)」の略語とみなされ、続いて1960年代美術の特徴的な傾向のひとつ、「Pop Art(ポップ・アート)」を指示することになる。しかし本論文ではより限定された意味の領野、すなわちアンディ・ウォーホルの著作に登場するこの言葉のさまざまな語義が主として参照される。そこではPop Artの旗手としてのウォーホルの3つの主要著作『The Philosophy of Andy Warhol (ぼくの哲学)』(1975年)、『Popism(ポップイズム)』(1980年)、『America』(1985年)の検討を通して、「美術」の枠を逸脱する特異な「Pop」思想の多義性、形成過程、諸効果が網羅的な分析の対象となる。

この作業においてはこの思想が形成された「アメリカ」という場がまず通時的かつ共時的に焦点化とされ、続いてアメリカの外部、とりわけ沖縄において「沖縄ポップ」と称される社会・文化現象が検討される。第二次世界大戦の激戦地となり、その後30年近く米国の占領下に置かれ、「日本復帰」後も依然として広大な米軍用地が広がる沖縄において、「Pop」という言葉は特有の多義性を帯びざるをえない。本論文の目的は、「Pop」思想の世界的な広がりとその特異な力学を、沖縄のケースに照らして記述することにあると言えよう。

このような主題を有する本論文は、それ自体、必然的に学際的な広がりを持ち、カルチュラル・スタディーズ、ポストコロニアル・スタディーズとともに、アメリカン・スタディーズとしての性格を持つ。本論文はまた、近年アメリカン・スタディーズ内部で「transnational turn」と呼ばれる、国家的枠組みを超えた研究動向に属している。

序論では、本論文全体の前提となる基本事項や視座、また関連する学的状況などが説明される。①日本語の「ポップ」を含む、「Pop」という語の使用の歴史的変遷および今日における用法が検討される ②アカデミックな領域における「ポピュラー・カルチャー」としての「Pop」思想の浸透に対し、「popular」の略語とはみなされえない「Pop」思想の検証が不在であることが確認される ③<Pop>(ポップ・アート)と<pop>(ポピュラー・カルチャー)と<ポップ>(日本および沖縄の文化領域における日本語表現)のそれぞれの語源、用法の考察およびその作業において不可欠な前提をなす「Pop Art」の内実が概観される。④関連する二つの学的領域における本論の位置づけが示される。第一に、ジャンル横断的なウォーホル研究との関係においては、それを歴史的変遷、テーマ別、ジャンル別に再構成し、「シミュレーション理論」、「表面」と「深層」、「パブリック」と「プライベート」などの二項図式を再検討すること、第二に、アメリカン・スタディーズとの関係においては、ウォーホル的「Pop」思想とアメリカニズムとの類似性と差異性を、沖縄から見える「アメリカ例外主義・アメリカニズム」との関連で分析することに、本論文の立場が示されることになる。

以下本論文は三部構成を取り、その各部は、固有の主題およびそれと関連するウォーホル的「Pop」思想論(3章)と沖縄論(2章)の計5章からなる。また各部の最後にレイモンド・ウィリアムズの『キーワード辞典』に範を取った「沖縄ポップ」の「キーワード解説」の章が設けられ、それまでの議論を別の角度から検証する仕組みになっている。このような往復運動によって、本論文は、ウォーホル的「Pop」思想と「沖縄ポップ」の諸関係を解明することを追求する。

第一部「Pop/pop」では、アメリカと沖縄における「Pop」的と呼びうる状況の基本的諸文脈が考察され、いくつかの特徴的なテキストや現象が、その社会的・歴史的諸条件との関連で検討される。

第一章「ウォーホルの出版物」では、ウォーホルの多様な作品群における「文学」の位置および著作に対する批評家たちの反応が論じられる。

第二章「Pop Art とアメリカ60年代」は、ウォーホルの60年代の回想記である『ポップイズム (POPism: The Warhol Sixties)』(Patt Hackett との共著)の記述をもとに、60年代的文化＝政治運動における「Pop Art」の位置、戦後の物質的豊かさとの関係、「Pop Art」に対する批評の反応が論じられる。

第三章「イフェクト／効果」では、ウォーホルが「イフェクト／効果」と呼ぶものがメディア社会との関係で論じられ、ウォーホル批評の一角を成すいわゆる「シミュレーション」解釈が問い直される。

第四章「物量のアメリカと沖縄文学」では、大城立裕の作品を中心に、地上戦から70年代までを扱った文学作品に表れる、沖縄におけるアメリカの「物量・大量さ」との接触経験が分析される。

第五章「キーワード“沖縄ポップ”1」では、音楽における「沖縄ポップ」という言葉と動向が検討される。その「ピーク」である90年代と「源流」となる60年代後半から70年代にかけての時代が比較考察され、「沖縄ポップ」という表現に内包されるある緊張が指摘される。

第二部「デモクラシー」は、「Pop」思想の「民主主義的」側面が、その社会・歴史的諸条件との関連で分析される。ここで扱われる「民主主義」は、政治制度以上に、大衆や平等、友愛など、民主主義のもとで顕著となる諸現象を指す。

第六章「アメリカ、マスの時代」では、20世紀中葉とともに、アメリカ史における「マス(大衆・大量さ)」の時代の一つとされる19世紀中葉、すなわち南北戦争前のアメリカに焦点が当てられる。当時の「平等でデモクラティックな社会」の雰囲気、関心および不安が分析され、20世紀中葉との類似性の理由が検討される。

第七章「表面／surface」では、ウォーホルの「Pop」定義のひとつである「表面」という概念が検討される。ウォーホルの「表面」へのこだわりとその効果が吟味され、「表層」と「深層」の二項対立に必ずしも還元されない「剰余」のありようが問われる。

第八章「すべて・みんな／everything」では、この語がウォーホルによる「Pop」のもうひとつの定義であることが指摘されその用法が分析される。そして、ウォーホルの著作におけるもう一つの特徴的な語彙である「fantasy」との関係を含め、「Pop」思想の民衆性、民主的性格の内実が検討される。

第九章「米琉親善」では、琉球・沖縄、アメリカ、日本を取り巻く政治的状況が、六章で検討された19世紀中葉と20世紀中葉の類似性を通して検討される。この両時代を通じて強調された「親善」や「友」(そしてその対概念としての「不信」「敵」)に注目し、ペリー来琉、米琉親善

活動、新川明『『有色人種』抄』、映画『八月十五夜の茶屋』、大城立裕『ニライカナイの街』などの諸事件、諸文献の分析を通して、琉球・沖縄における交錯する「友」の地勢が描出される。

第十章「キーワード“沖縄ポップ”2」では、美術における「沖縄ポップ」の不在という事実を手がかりに、西欧や日本の状況と比較しつつ、沖縄における美術状況、沖縄とモダニズム・ポストモダニズムの関係が議論される。

第三部「アメリカ／沖縄」は、ウォーホル的「Pop」思想の「アメリカ的」側面が、「American」という形容詞と「Pop」という語の相互作用の分析を通して検討される。また沖縄に関する議論では、ウォーホル的「Pop」思想の主題の一部を転用しつつ、「沖縄的」とはいかなることか、同時代的諸文脈において吟味される。

第十一章「写真とアメリカ」は、ウォーホルのテキスト付き写真 *America* (1985) を対象に、スーザン・ソントグ『写真論』に依拠しつつ、「アメリカ」と写真と「Pop」の間にある本質的な諸関係が発見される。ここで目的は、ウォーホルにとっての「普通の人々」に属する、アメリカ的「Pop」を浮かび上がらせることである。

第十二章「マシーン・機械」では、ウォーホルが機械に対して持っていた密接な関係、「マシーンとしての人間」という彼のヴィジョンが、19世紀の仕事の科学やフォーディズム、ポスト・フォーディズムとの関連で解明される。彼のマシーン志向のある種の一貫性が指摘されると同時に、「マシーン」のイフェクトの「アメリカ性」が示唆される。

第十三章「アメリカ的」は、本論文が扱ってきた三冊の著作において、ウォーホルが「アメリカ的(American)」と表現しているものが集中的に分析される。そして、「アメリカ例外主義」の言説の一つである「アメリカ的新しさ」とウォーホル的なそれとの類似性と差異性が検討される。

第十四章「写真・映像と沖縄」では、比嘉康雄『生まれ島・沖縄』、比嘉豊光『赤いゴーヤー』、高嶺剛『オキナワン・ドリーム・ショー』など、「日本復帰」前後の沖縄の写真・映像作品を考察し、これらのイメージを通して見えてくる「沖縄」が論じられる。

第十五章「キーワード“沖縄ポップ”3」では、ウォーホル的「Pop」思想と同様に、日常の事物や場面、物事の捉え方から「存在論」にまで及ぶ、広義の「沖縄ポップ」とも言うべきものが、新城和博と照屋林助という異なる世代のふたりの沖縄人の文章および著作を通して考察される。ここで議論される「沖縄ポップ」及び「チャンプルー」(混濁性)が、沖縄における構成主義的側面につながるものであり、ウォーホル的「Pop」思想と類似を示しつつも、本質的に異なるものであることが主張される。

「結論」では、「Pop」思想と「沖縄ポップ」をそれぞれに総括しつつ、本論文全体を通して浮かび上がるいくつかの係争点があらかじめ論じられる。ウォーホルが「ポピュラー・カルチャー」と戯れつつ20世紀中葉のアメリカで製造した「ポップ・アート」は、20世紀中葉のアメリカ的資本主義とアメリカ的理想から生じたものである。それは一方では「アメリカ」を脱本質化・構成主義化するが、他方では再神話化する可能性も内包している。アメリカ的な「Pop」が旧世界・ヨーロッパとの関わり・交渉から生じてきたのに対し、「沖縄ポップ」はアメリカおよび日本との関わり・交渉から出てきたものである。「Pop」思想という枠組みにおいて両者を比較検討することで関係の非対称性が照射され、類似するがゆえにかえって差異の大きさが際立つのである。本論文は、「沖縄人あるいはマイノリティは、“Pop／ポップ”になりうるのか(もし

くはなるべきなのか」という問いをめぐって構想され、「Pop」思想と「沖縄ポップ」がもつ輻輳性および両義性、それらを取り巻く不均等で重層的な編制が、その困難そのものにおいて記述されたことが確認される。

なお本論文には、「プロローグ」、「エピローグ」、「付録」という形で、アメリカと沖縄に関連するエッセイ3編が収められている。

### 3 本論文の成果と問題点

本論文の成果は第一に、ウォーホル研究と沖縄研究という二重の主題を、〈ポップ・アート〉〈ポップ・カルチャー〉〈沖縄ポップ〉という三重の相のもとに捉え返された「Pop」思想によって統合し、精緻な解読装置をみずから構築し駆使することによって、アメリカと沖縄の政治的・文化的諸関係に独創的な解釈を施したことである。

第二に、アメリカ研究の領域で、外部の視点の導入による「アメリカ例外主義」の再検討という課題において注目すべき成果を挙げたことである。とりわけ、アメリカ文化の特徴である「物量」の意味するところがアメリカ本国と沖縄でいかに異なるかを、大城立裕の作品を通して解明した部分は、著者のテキスト読解能力の卓越性を見事に証明したものであるとして評価されよう。

第三に、沖縄研究の領域で、音楽、美術、文学、写真等、現代沖縄における文化実践を横断的に踏査し、斬新な歴史的展望のなかで、沖縄文化の現状に関する犀利な洞察を提示したことである。また、著者独特の論じかつ語る速度感にあふれた文体によって、440頁に及ぶ大部の論文が読み易い形に仕上げられていることも、特筆に価する成果と言えよう。

とはいえ、本論文にも若干の問題点は存在する。ウォーホル研究と沖縄研究という二重の主題が「Pop/pop/ポップ」など独自の用語系を通して論じられていくなかで、両者の間の関連がときとして把握し難くなることは否めない。しかし、この問題は本論文が全体として達成した成果に比べれば瑕瑾に類するものであり、その価値を大きく損なうものではない。本論文が、著者の今後の活躍をおおいに期待させてくれるすぐれたものであることにかわりはない。

以上の判断のうえに、審査員一同は、本論文が独創的かつ優秀であることを認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えている。

## 最終試験結果要旨

2011年3月14日

受験者 山城雅江  
最終試験委員 鵜飼哲 三浦玲一 田仲康博

2012年2月13日、学位請求論文提出者 山城雅江氏の論文および関連分野について、本学学位規定第8条第1項に定められた最終試験を実施した。

試験において、提出論文「Pop 的／アメリカ的：ウォーホルから＜沖縄＞へ」に関する問題点及び関連分野について質疑を行い、説明を求めたのに対して、山城雅江氏は適切な説明を以て応えた。

よって審査員一同は、山城雅江氏が学位を授与されるに必要な研究業績及び学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。